

NEW - す

2014.7

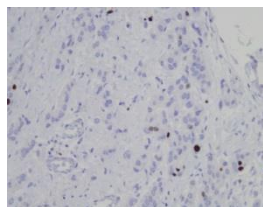
乳がん

Ki67

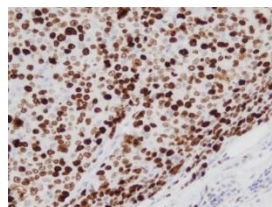
乳がん手術を受けられた患者さんでは、通常退院後初回の外来受診時に担当医から摘出した標本の病理検査(顕微鏡検査)の詳細な結果が説明されます。検体を用いた検査でも、例えば血液検査なら、貧血がある、コレステロール値が高いといった比較的わかりやすい説明内容であるのに対して、病理検査結果というのは概してとつき難い専門的な内容も含まれます。私たち医療者はなるべくわかりやすい表現を心掛けていますが、理解不十分なまま診察室をあとにする方もおられることでしょう。なじみの薄い用語が次々出てくるのも理解を困難にしている要因のひとつですが、そのような病理検査項目のひとつにKi67(ケーアイ67あるいはキー67)があります。

Ki67とは、増殖しているがん細胞で出現するタンパクで、Ki67陽性細胞の比率で〇〇.〇%というように表現します。この数値が高ければ高いほど増殖スピードの速い悪性度の高いがんということになります。Ki67自体すでに30年近く前に発見され、乳がんを含むいくつかのがんで予後因子(再発リスクの指標)として有用性が報告されていたのですが広く普及するには至りませんでした。これが、乳がんでにわかに再注目されるようになったのは2009年開催のザンクトガレン・コンセンサス会議という国際会議での推奨がきっかけです。当時わが国では病理医の協力体制が困難などの理由からKi67検査の導入に躊躇する施設も多かったのですが、市立貝塚病院ではこの推奨を受け2009年以降乳がんで全例Ki67測定を行い、あとの治療方針に反映させてきました。

例えば、ホルモン感受性の高い乳がんでは術後の薬物療法はホルモン療法が中心になりますが、悪性度が高ければ抗がん剤治療(化学療法)の追加が必要となります。Ki67はまさにそのような治療方針決定の判断材料になります。もちろんKi67値の高低だけで決めるのではなく、ホルモン感受性の程度、腫瘍の大きさ、リンパ節転移の有無、グレード(がんの顔つき)、リンパ管侵襲(リンパ管にがん細胞が入り込んでいるかどうか)、患者さんの希望、など総合的に判断されるので、Ki67はそのような予後因子あるは抗がん剤感受性の目安の一つと理解してください。なお非浸潤性乳がんという超早期のがんではKi67測定の対象にはなりません。



Ki67
4.6%



Ki67
88.0%



がんが大きくなるスピードもまちまち
Ki67はその指標

Ki67が高いほど
・悪性度は高い
・だけど、抗がん剤が有効

詳細は乳がん高度検診・治療センターにお問い合わせください。

市立貝塚病院

TEL : 072-422-5865



KAZUKA

